

<書 評>

久保文明・金成隆一
『アメリカ大統領選』

(岩波書店, 2020年, 242頁)

軽部恵子

本書は、東京大学で現代アメリカ政治・現代アメリカ政治史を教授する久保文明と朝日新聞記者の金成隆一の共著である。久保の最近の著作は、『アメリカ政治史』(有斐閣, 2018), 阿川尚之および梅川健との共編著『アメリカ大統領の権限とその限界』(東京財団政策研究所, 2018), 砂田一郎らとの共著『アメリカ政治第3版』(有斐閣, 2017)など、枚挙に暇がない。一方、金成には『ルポ トランプ王国: もう一つのアメリカに行く』(岩波書店, 2017), 『ルポ トランプ王国2: ラストベルト再訪』(岩波書店, 2019), 『記者, ラストベルトに住む: トランプ王国, 冷めぬ熱狂』(朝日新聞出版, 2018)のルポルタージュがある。金成は渾身の取材で、2018年度のボーン・上田記念国際記者賞を受賞した。

本書は、第1章1および2, 終章を久保が、その他を金成が執筆しているが、互いに加筆・修正・削除しあった(p.238)ため、文章のスタイルが統一されており、1人の筆者の手によるかのように違和感がない。また、学術的な分析と歴史、過去の事例、ルポルタージュがちょうどよい配分になっている。大学生はもちろん、高校生、教員、ビジネスパーソンなど、色々な立場の人が2020年の大統領選挙を理解し、総括する上で大いに助けとなるで

あろう。

本書は「はじめに」および「あとがき」を除き、計5章から構成される。第1章「アメリカ政治のリニューアル」では、「1 大統領制とは何か」、「2 大統領選と政党政治の歴史」、「3 大統領選の基本」の3節に分けて、アメリカ大統領選に関する中身の豊富な解説が大統領就任演説などをもとに展開される。アメリカの政権交代は、大統領の強い人事権ゆえに革命のような性格を持つが、独立性の強い議会の存在によって抑制されているという(p. 22)。今の日本人にはとくに耳の痛い指摘である。

第2章「予備選の現場を歩く」は、「1 立候補表明」「2 予備選開始」から成る。アメリカ大統領選が大統領選挙人を通した間接選挙であり、かつ予備選を含めると1年以上の長丁場であることは、今さら説明するまでもないだろう。何しろ、日本ではニュース番組からワイドショー、情報バラエティー番組など、至るところで取り上げられているのだから。この機会に、日本の選挙制度に対して関心を持つ人が増えることを期待したい。

第3章「本選の現場を歩く」は「1 全国党大会」「2 頂上決戦」から成る。2016年のクリントン対トランプの大統領選で、選挙運動の日数、演説の回数、資金パーティーの回数、テレビ広告への支出総額などが細かに書かれており、選挙運動の規模と長さに実感を持たせてくれる。過去の大統領候補によるテレビ討論会で、どんな発言が致命傷となったかも紹介されているが、これらの失敗例は日本人のプレゼンテーションにも大いに役立つであろう。人前に立って相手を論破し、聴衆を説得するには、議論の中身だけでなく、表情筋の動かし方から仕草まで、細かく気を配る必要がある。

第4章「二極化する社会と大統領選」は「1 さまざまな分断線」「2 変化する大統領選挙の構図」から成る。バイデン候補は11月7日の勝利宣言の中で「癒やし」と「結束」を呼びかけたが、これだけトランプ支持者と反トランプに分断された国民をまとめるのは容易ではない。条約批准や政府高官の承認を行う連邦上院で共和党が過半数を維持する可能性が高いことか

ら、なおさらである。

終章「2120年の大統領選挙」は久保が純粹な想像を巡らしているが、長年の研究に基づく予測であるため、移民問題などいかにもありそうなシナリオとなっている。ただ、久保の言うトランプⅡ、トランプⅢだけは起きてほしくない。

今回の選挙は事前に予想されていたとおり、11月3日に投票した共和党支持者によってトランプ大統領の得票が先に伸び、郵便投票の開票によってバイデン候補の得票が伸びた。いわゆる「レッド・ミラージュ（赤い蜃気楼）」と「ブルー・シフト（青方偏移）」である。一方、事前の世論調査と異なり、オハイオやフロリダでトランプ大統領が勝利するなど、当初は4年前の再現になるかと思われた。それでも、バイデンは辛抱強く開票結果を待ち続けた。当確の報が流れると、各国の行政府の長から祝電やツイッターのお祝いメッセージが次々と送られてきた。

濃色のスーツを着てマイクの前に立ち、勝利宣言に臨んだバイデンは、早くも伝統的な大統領の風格を備えていた。だが、これは決して容易な勝利ではなかった。第1回大統領討論会では、トランプ大統領がバイデンや司会の発言中に何度も割り込みし、支離滅裂ともいえる議論を平然と展開した。おかげで、第2回討論会のルールが、相手の発言中に割り込めないようマイクを消音にすると変更されたほどである。もし、第1回討論会の司会が保守系FOXテレビのクリス・ウォレスでなかったら、大統領は誰にも制止されることなく、バイデン候補を徹底的にやり込め、有権者に対し「ねぼけたジョー」(Sleepy Joe)を強く印象づけることに成功したかもしれない。クリスの父は、CBSの著名な報道番組「60ミニッツ」の元看板キャスター、マイク・ウォレスである。そういえば、先月21日に60ミニッツを収録中、トランプ大統領はベテラン・インタビュアーのレズリー・ストールと番組を侮辱して席を立ち、収録を中断させたという(Caitlin Oprysko, "Lesley Stahl says Trump and Pence insulted her and '60 Minutes,'" *POLITICO*,

October 22, 2020, <https://www.politico.com/news/2020/10/22/trump-posts-60-minutes-interview-431218>, accessed November 8, 2020)。

今後の展開は不明である。トランプ大統領は郵便投票により逆転されたウィスコンシン、ミシガン、ペンシルヴェニア州などで不正があったとして訴訟を起こし、連邦最高裁まで争うつもりである。敗北宣言を行う気配はまったくない。

振り返ると、2000年の大統領選挙では、ゴア副大統領（当時）とG.W.ブッシュ候補がフロリダ州で僅差となった得票を巡り、再集計と集計差し止めをそれぞれ求め、法廷闘争を1ヵ月あまり繰り広げたが、ゴアが国のまとまりを維持するために同年12月13日に敗北宣言を行った。これにより、ブッシュが大統領選挙人獲得数でゴアを上回って、大統領に選出された。

現在、トランプ大統領をメラニア夫人、お気に入りの長女イヴァンカ、娘婿のジャレッド・クシュナーが敗北宣言を行い、「名誉ある撤退」をするよう説得しているとも言われる。一方、息子のドナルドJr. とエリックが諦めていないらしい。ホワイトハウスの外では、トランプが出演していたリアリティー番組『アプレンティス（見習い）』の決め台詞「おまえはクビだ！」（You are fired!）のプラカードを掲げて、若者たちが踊っている。トランプを巡る状況は、テレビドラマを地で行くような展開である。

最後に、評者にとって印象的であったのは、勝利宣言をするバイデンの前に登場したカマラ・ハリス連邦上院議員の服装であった。「史上初の女性副大統領」、「初のアフリカ系・南アジア系副大統領」となるハリスは、白のパンツスーツに白いポータイのブラウスという装いであった。白はアメリカ女性参政権運動を象徴する色である。当時、女性参政権運動家たちは「男っばい」、「醜い」とされがちだったので、全身白のドレスを着て行進したという（National Park Service, “Colors: White,” in “Symbols of the Women’s Suffrage Movement,” <https://www.nps.gov/articles/symbols-of-the-women-s-suffrage-movement.htm>, accessed November 8, 2020)。初の女性副大統領の

誕生は、アメリカ女性参政権（合衆国憲法修正19条）100周年の今年にふさわしいできごとであった。

4年前の2016年10月20日、民主党のヒラリー・クリントン候補（当時）が第3回大統領選討論会に現れた時、同じく全身白のパンツスーツを着ていた。1回目の討論会は全身赤のパンツスーツ、2回目はネイビーのパンツスーツであったので、3回を合わせるとアメリカ国旗の色にもなっていた。クリントンは一般投票では6252万1739票を得、6119万5258票のトランプ候補を大きく上回ったが、大統領選挙人の獲得数で304人対227人と敗北した（NHK, US Elections 2016, <https://www.3nhk.or.jp/news/special/2016-presidential-election/index.html>, accessed November 8, 2020）。民主党の地盤だったペンシルヴェニア、オハイオ、ミシガン州などの「ラストベルト（錆びた工業地帯）」を獲得できなかったことが響いた。

2017年1月20日、トランプの大統領の就任式に歴代大統領の配偶者として列席したクリントンは、白のパンツスーツと純白のロングコートを選んだ。主要政党初の女性大統領候補としての矜持であった。クリントンの服装は次の記事の写真がわかりやすい。Samantha Wilson, Political News Editor, “Hillary Clinton’s Inauguration Outfit: Looks Beautiful & Chick in White Pantsuit,” *Hollywood Life*, January 20, 2017, <https://hollywoodlife.com/2017/01/20/hillary-clinton-outfit-inauguration-photos-white-pantsuit/>, accessed November 8, 2020。

勝利宣言の夜に白をまとったハリスを見てヒラリー・クリントンが何を思ったか、評者には知るよしもないが、クリントンは今年のニューヨーク州選挙人団の1人に選ばれた（Joel Shannon, “4 years after it cost her the presidency: ‘Pretty sure I’ll get to vote for Joe,’” *USA Today*, October 28, 2020, accessed November 8, 2020）。1848年にセネカ・フォールズで始まった女性参政権運動が約170年の時を経て、初の女性大統領誕生に大きく近づいた夜であった。